

IF 魔法少女リリカル  
なのはStrikerS 短編  
死神の刀 ～序章～

辺 鋭一

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

にじファンよりの短編移転、最後の作品です。

なのは×斬魄刀です。

この作品は短編ですが、文字数が3万を超えるという意味不明な作品です。

自己満足作品ではありますが、お暇ならば覗いてみてください。

上・下に分けました。

下 上

--	--

39 1

# 目次



●

世界は一つきりではない。

一つ次元を超えれば数えきれないほどの異世界が存在しており、また、数多くの文明も存在する。

それらの次元世界の中にはすでに滅んでしまったものもあり、その世界においてごく稀に発見される遺物は、他の世界では再現できない物が多く、危険なものはロストログイアと呼ばれ、嚴重に管理される。

そして、それらの次元世界の法と秩序を守るのが、時空管理局である。

そこでは、日夜局員たちが、それぞれの世界を守るために活動していた。

その管理局に認識されている世界の事を「管理世界」と呼ぶ。

また、管理世界や管理外世界に関わらず、これらの世界の中には魔法という物が存在する所もある。

魔法とはいっても理屈を超えた物ではなく、科学理論に則った純粋な技術である。

その魔法を行使する者を支えるのが、魔道士たちが持つデバイスという物である。

これは、持ち主が魔法を使う際のアシストをするための道具であり、苦勞を分かち合う相棒でもある。

この魔法には、大きく分けて二つの種類が存在することが知られている。

一つは、様々な状況に対応できる遠近取り揃えたオールラウンド系の魔法「ミットチルダ式魔法」。

もう一つは、近距離個人戦に秀でた戦いのための魔法「ベルカ式魔法」。

特徴の違う二つの魔法体型に合わせ、魔道士たちが持つデバイスにもそれぞれの使う魔法に合った設計がなされている。

……だが、実はもう一つ、公には知られていない魔法体型が存在する。

それは、とある特殊なデバイスを持つことで使うことのできる、強力な力であった。

その魔法は、そのデバイスの製作者の名前を取って「カガミ式魔法」と呼ばれていた。

だが、あまりにも強力で、あまりにも危険だと製作者自身に判断され、各地で使われていたそれらのデバイスを製作者自らが回収し、誰にも見つからないように無人の世界に移り住んで封印しまったため、今では知る者がほとんどいない魔法になってしまった。

その後、その世界でデバイスの製作者とその家族は細々と暮らしていた。

月日が流れ、その世界にはそのデバイス製作者の他にも多くの人間たちが移り住んできていた。

それらの人たちの多くが、デバイス製作者と同じように元いた世界と袂を分かつたために逃げてきた者たちとその家族であり、同じような境遇の為か、彼らは互いに仲が良くなり、その世界で平和な時間を過ごしていた。

とはいえ、この世界も管理局と無関係ではいられない。むしろ積極的にかかわっている。

なぜならば、この世界にいる者たちは、他の世界から見れば重要な人物たちばかりだからだ。

そんなしがらみから逃げてきた者たちは、管理局に自分たちの存在を知らせ、時には情報提供などもして、自分たちの住む世界を他の世界からの魔の手から守ってもらっていた。

とはいえ、彼らが提供するの医療技術などのみであり、戦闘に関わる技術は一切渡さなかつたし、管理局側もそれを了承して友好的な関係を築いていた。

そしてさらに月日が流れ、現代。

その世界、「隠遁世界・ハイデル」と管理局との交流は続いており、その中には住人、管理局という立場をこえた、私的な付き合いも存在していた。

そんな平和な「ハイデイル」において、ある日大きな事件が起きた。

最初にこの世界に移り住んできたデバイス職人の子孫で、代々この世界の代表として管理局との窓口役ともなっていたカガミの家が襲われ、嚴重に封印してあったカガミ式のデバイスの一種、通称「ザンパクトウシリーズ」百点あまりが盗まれたのだ。

幸いにも、その家の者たちは無事だったが、強力な武器であるそれらが犯罪者の手に渡ってしまったというのは大きな問題であり、管理局はそれに対して動かないわけにはいかなかった。

だがその当時、管理局は大きな事件の後処理が済んだばかりであり、その事件で疲弊しきった管理局にはカガミ式デバイス盗難事件にさける人的余裕がなかった。

そこで、その大事件が起こる少し前に設立され、事件が解決したと同時に存在意義の大半が失われてしまった部隊、「古代遺物管理部 機動六課」に白羽の矢が立ったのである。



今回の任務についての概要を説明し終え、機動六課スターズ分隊長・高町なのは一等空尉は会議室にいる六課の面々を見渡して、



「これまでの概要はこんなところですけど、ここまでで何か質問はありますか？」  
と言った。

しばしの無言の後、椅子に座って机に広げた資料を見ながらなのは話を聞いていた、長髪をポニーテールにした長身の女性、シグナムが手を上げて発言する。

「……つまり、今回の任務は、そのザンパクトウシリーズの確保と強盗犯の拘束、ということか？」

「概ねそれで間違いありません。ですが、それに付いての補足を……シャーリー、お願いします」

なのはに呼ばれて前に出てきたシャリオ・フィニーノ一等陸士は、会議室内の機動六課の面々を見渡し、言う。

「今回の任務は先ほどシグナム副隊長が言った通り、カガミ式デバイス・ザンパクトウシリーズの確保と、保持者、つまり盗んだ犯人の拘束です。……ですが、デバイスの確保が困難な場合、破壊することも任務に含まれます」

その言葉に、会議室全体に困惑が広がる。

それを感じ取りながらもシャーリーは一切気にせず、言葉を続ける。

「最後の『デバイスの破壊』に関して、皆さんに紹介したい人がいます。……チトセ、前

に出てきてくれる？」

「——はい」

シャーリーの呼びかけに、涼やかな声の返事が返ってくる。

その声を発したのは、会議室の最前列の隅に座っていた女性だった。

彼女はその声にたがわぬ鋭いまなざしを前に向け立ち上がり、紙紐で簡単にくくっただけの腰まで届く真つ直ぐな黒髪を揺らしながらシャーリーの横に並び立ち、皆の方を見る。

実は彼女、この会議室に一番早く来て最前列の隅に座っていた。

後から集まってきた六課の隊員は、六課の制服を着ていない彼女がこの場所にいることを疑問に思い声をかけようとしたのだが、背筋を伸ばして目を閉じ静かにすわっている、それだけなのにもまるで抜き身の剣のような鋭い雰囲気を持っている彼女に、その雰囲気突き破って話しかけられる猛者は、六課の中にはいなかった。

そのため隊員たちは、なのはの話を知っている最中も心の片隅では見慣れぬ彼女の事を気にかけていた。

その彼女の正体がやつとわかるといふことで、皆が彼女に意識を向けた。

気の弱い者ならば泣き出してしまいそうな密度の視線を一身に集めながら、それでも彼女は平然と立っている。

そんな彼女を示し、ついでの空間に映像を投影しながらシャーリーは彼女の紹介を始める。

「彼女の名前はチトセ・カガミ。今回事件のあつたハイデイル在住の一般市民です。姓からわかる方もいると思いますが、彼女は今回被害にあつたカガミ家の方であり、次期当主でもあり、またカガミ式デバイスの開発者、カンジ・カガミ氏の子孫でもありません」

投影された映像にも示されるその紹介に、皆が驚く中、シャーリーの話は進んで行く。「彼女はデバイスマイスターでもあり、その縁で私とも私的な付き合いがあります。また今回の件で、一般にはあまり知られていないカガミ式魔法、およびデバイスの情報を提供していただく、民間協力者でもあります。……チトセ、皆さんにご挨拶を」

はい、とうなずいた彼女は一步前に出て、自分を見ている者たちに向かつて一度礼をしてから、

「皆様はじめまして。管理世界「ハイデイル」の代表であるカガミ家の次期当主、チトセ・カガミと申します」

彼女の涼やかながらも鋭い声は、音響魔法を用いずとも会議室全体に響き渡った。

「本日は、私の先祖が作り出したモノのせいでご迷惑をおかけすることになってしまい、大変申し訳ありません。私どもも、今回の件には大変心を痛めており、また、カガミ式

デバイスが罪無き一般市民を傷つけることを何よりも恐れています。ですので、今回の件に対し、我々カガミ家は全面的に協力することと決定し、その代表として私が遣わされてここに来ました」

皆彼女の雰囲気呑まれ、彼女から視線を逸らせないでいる。

「そして、今回の件において、我々カガミ家は三つの決定をいたしました。それは、このようなことに使用される可能性のあるものは、速やかに回収し、さらに嚴重な封印を施すということ。次いで、もし回収が困難であるならば、二度と使えぬように破壊してしまふことも辞さないということ。最後に、そのためにカガミ式デバイスの事をよく知る者、つまり私をこの機動六課に協力者として派遣することです」

チトセは皆を見渡し、

「非才の身ではありませんが、今回の件の迅速な解決の為、この身を粉にして努める所存であります。皆様も、なにとぞご協力をお願いいたします」

深く、一礼した。



チトセの挨拶の後、詳しいことや補足をなのはが皆に伝え、解散となった。

機動六課の部隊長である八神はやては、この後の細かいことを詰めるため部隊長室に戻り、それ以外のスターズ、ライトニング分隊のメンバー全員とチトセは演習場に集まっている。

それぞれの分隊の隊長・副隊長達は、前線フォワードである部下たち四人と向かい合っている。ちなみにチトセは隊長側だ。

フォワードたちは任務の説明が終わった後、訓練のためにここに来たのだが、なぜここに協力者であるチトセがいるのかと不思議がついている。

そんな部下たちの様子に苦笑しながら、なのはは話し始める。

「さてみんな、準備運動はすんだね？　これから午前の訓練を始めます。今日は予定を変更して、さつき説明した任務の対策訓練とします」

『対策訓練？』と疑問を浮かべる四人にライトニング隊長、フェイト・テストロッサ・ハラオウンが補足する。

「今回の任務で戦うことになるカガミ式の魔法は今まで戦ってきた魔法とは種類がぜんぜん違うの。だからいきなり戦って驚かないように、どんなものかを知っておいてほしいんだ」

その言葉に四人は『ああ、なるほど』と納得した表情を浮かべる。

今回盗まれたデバイスの数は百あまり。単純に考えてもそれだけの数の犯罪者と戦

わなければいけないのだから、その対策法を知っておくのは早いに越したことはない。

皆の理解が済んだところで、なのはは隣に並ぶチトセを示し、

「そんなわけで、これから事件解決までの間皆に対カガミ式の魔法戦闘法を教えてください  
るチトセ・カガミさんです。一時的にとはいえ教官になる方だから、皆、挨拶して」

「「よろしくお願いします!!」」

威勢よく挨拶した四人に、チトセは一步前に出る。

そうして四人の前に立ったチトセはニカツと笑い、

「よう、ガキ共。いま紹介されたが、チトセ・カガミだ。チトセと呼んでくれ。これか  
らしばらくの間ここにやつかいになるぜ、よろしくな」

四人の顔を歪ませた。



何とも言えない顔を見せて固まっている四人を、チトセは不思議そうに眺めて、それ  
から自分の友人の方に顔を向けて問い掛ける。

「おいシャーリー、何でこいつら変な顔してるんだ？ ミッドじゃあこれが挨拶なのか

？ だったら言つといてくれよ、突然の事だからどんな顔したらいかわかんねえよ」

『こんな感じか?』とかいいながら、チトセは出来るかぎりの変な顔をシャーリーに向ける。

それがどうみても強烈なメンチを切っているようにしか見えないのは、……まあ気にしないでおく。

今も妙な顔をしているフォワード部隊の少女、キャロ・ル・ルシエには立ち位置の関係で見えてはいないが、もし見えていたら泣き出しているであろう恐ろしい顔を向けられながら問いつけられたシャーリーは『やっぱりこうなつたか』と苦笑しながら、

「チトセ、ミッドにそんな挨拶は存在しないわ。この子達は多分、貴女の態度に驚いているのよ」

それを聞いて、チトセは一瞬眉をひそめて考えるそぶりを見せ、それからすぐに理解したのか表情を変える。

その光景はまさに百面相と言える物で、

「ああ、なるほどな。おめえらあたしの事良い所のお嬢様だとか思ってたのか。その期待を裏切るようで悪いが、私はこういう人間だ」

『あつはつは』と豪快に笑うチトセを見て、四人は説明を求めると同時に彼女の友人だというシャーリーのの方を見る。

その視線に彼女は『ははは……』と力なく笑い、

「チトセはね、かなりのあがり症なのよ。だから、ああいうかしこまった場で大勢の前に出ると性格が変わってあんなふうな見た目通りの言動をするようになるんだけど、本来の性格はこつちななの。……皆最初は慣れないと思うけど、よろしくしてあげてね」

『残念美人』という言葉がこの場にいるチトセ以外の全員の脳裏をよぎった。

フォワード陣の司令塔であるティアナ・ランスターは頭の中に浮かんだ失礼極まりない言葉をさっさと振り払い、質問する。

「——話を戻しますが、今日の訓練はチトセさんにカガミ式についてのお話を聞いて、その後にカガミ式に対する戦闘訓練をおこなう、ということでもいいんでしょうか？」

「あはは、半分正解で半分はずれだ。残念だったねお嬢ちゃん」

にやりと笑いながら言われた言葉にムツとした表情を浮かべる親友を落ち着かせながら、スバル・ナカジマは尋ねる。

「あ、あの！ 半分、というのはいったい……？」

それに答えたのは、今まで腕を組んで立っているだけだった見た目は子どものスターズ隊副隊長・ヴィータだった。

「……お前たちには、まず全く情報を与えずにカガミ式魔法相手の戦闘訓練に入ってもらおう。そのための対戦相手もいるしな」

「……対戦相手……？ その方はどこにいるんですか？」



この場に該当する人物が見当たらないことから赤毛の少年、エリオ・モンディアルが質問する。

「おいおい失敬な坊やだな。ここにいるだろ立派なカガミ式の使い手が！」

エリオの問いにそう答え、カガミは眉を不機嫌そうに顰め、左手の親指で自分の胸の中心を指しながら言う。

「あたしはチトセ・カガミ。今現在ミッドにおいて、唯一カガミ式デバイスを持つことが許されている人間さ!!」



海上に浮かぶ陸戦用空間シミュレーターの上に、フォワード四人とチトセが対峙している。

今回シミュレーターに展開されているのは、砂と岩だけしか存在しない荒野のステージだ。

そこにいる五人は全員訓練着を着ており、デバイスは誰も展開していない。

フォワード陣はティアナを中心に、後方にキャロ、前列右にスバル、左にエリオが布陣されており、それに対峙するチトセは自然体で立っているだけだ。

その様子をシミュレーターの外からモニター越しに眺めているのは隊長陣達とシャリー。

にらみ合う二組のいる空間に、なのはの声が響く。

『それじゃあみんな、いきなり襲われたという設定で模擬戦を始めるよ！ 何の情報も無い状況でカガミ式の魔術師に襲われた場合どうなるか、その魔法の恐ろしさと共にしっかりと学んで来てね！ ——それじゃあ、開始!!』

言葉に終了と共にブザーが鳴り響き、それと同時にティアナの首に冷たいモノがふれた。

「——え?」

ティアナの視界は黒一色に染まっている。

例外は視界の下の方に存在する銀色の線のみであり、その線の一方は自分の首のすぐ隣に、もう一方はいつの間にか真っ黒な服を着て自分の前に立っているチトセの手元に延びていて——

「——油断大敵だよ。一回死亡だ、お嬢ちゃん」



驚きで動けなかったティアナと、その陰に隠れてしまったため状況がよくつかめていなかったキャラ口以外で、最初に動いたのはスバルだった。

素早くセットアップし、両足に装備されたデバイス・マツハキャリバーのうちの左足ですぐ横にいるチトセを薙ぎ払うように蹴飛ばそうとする。

かなりの速さで行われたスバルの攻撃だったが、それをチトセはその場から飛びのき、元の場所まで戻ることで回避した。

その様子を離れたところから見ていた隊長陣の内、なのはが最初に声を上げた。

「……フェイトちゃん、今のチトセさんの動き、見えた……？」

「うん、一応。ただ、かなり早いね。リミッター付きの私のトップスピードくらいはあると思う」

なのはの問いに答えたフェイトの呟くような声も響く。

「……悪いが誰か今あったことを説明してくれ。あたしにはよく見えなかった……」

ちようど見ていたモニターがフォワード陣の場所だったためチトセの動きを見ていなかったヴィータが悔しそうに言う。

それに答えたのはフェイトだった。

「……今彼女がしたことは、大したことじゃない。セットアップしてティアナの前に行き、デバイスである刀をティアナの首にふれさせただけ。ただ、そのスピードが異常

だったけど……」

「同感だ。あれはかなり早い。……ソニックムーブと似た系統の魔法のようだが、少々違うな……」

「あれは瞬歩しゅんぽ、カガミ式魔法の一つです。一応はソニックムーブの親戚のようなものなんですけど……」

フェイトの答えに同意するようにつぶやいたシグナムに、シャーリーはチトセが使った技の解説を始める。

「違いとしては、一気にトップスピードを出して一気に減速するというオンオフの速さ。そして短距離専門の超加速術であるということ。それ故にきちんと気を張って見えないと瞬間移動のように感じてしまう技法です」

彼女は常にチトセをマークする設定をしたモニターをそれぞれの前に展開しながら言う。

「……ですが、カガミ式の本領はまだまだこんなものじゃありませんよ」



……なんなのよあの人……！

元いた場所に飛び退いて戻るチトセを見ながら、ティアナは混乱する思考を必死に抑え込んでいた。

先ほどまででティアナが見えていたのは、開始の合図と同時にチトセが左腕にはめられた銀色のブレスレットを掲げて何かを呟いたところまでだ。

恐らくそれがセットアップの掛け声だったのだろうが、それに反応する暇もなく先ほどの事態に陥ってしまった。

今彼女はバリアジャケットなのであろう、黒い鞆を腰に差したこれまた真つ黒な着物を着て、右手に持った抜き身の刀と共に自然体で立っている。

……いきなり襲われるっていう設定だったとはいえ、こっちのセットアップも待つてくれないなんて……!!

とはいえ彼女は設定どおりに動いただけで、一切非はない。

先ほどチトセに言われた通り、これは純粋な油断の結果で、その証は今も自身の首に違和感として残っている。

思わず首筋を強くこすり、先ほどまで感じていた冷たい感触を消すと、

「皆！ 急いでセットアップ！ あの人、本気よ!!」

叫ぶようにそう指示を出し、自分もセットアップしてバリアジャケットを纏う。

すでにセットアップしていたスバルを含め、全員がバリアジャケットを纏っているの

を確認すると、

「皆、あの人かなり強いわ。たぶんだけど隊長クラス。私が言えた事じゃないけど、甘さはすべて捨てていくわよ！」

両手に己の相棒であるクロスミラージュを構えて、

「GO!!」

打倒チトセに向けて全力で進んでいった。



チトセの少々手荒な挨拶によつて気分を引き締められたフォワードたち四人は全力で敵チトセに向かって行った。

エリオとスバルが打撃を与え、キャロはそれをサポートし、ティアナが戦況を見て指示を出しながら見つけた隙に魔法弾を叩き込んでいく。

さすがに密度の濃い訓練を共に乗り切ってきただけのことは有り、その連携は素晴らしいの一言に尽きる。

その猛攻を受けては、さすがのチトセも最初の余裕は消え去り、防戦に回らざるを得ないようだ。

自分に向かって飛んでくる拳や蹴りをかいくぐり、叩き込まれる槍を腰から抜いた鞘で払いのけ、的確なタイミングと位置に撃ちこまれる魔法弾を切り払い、足元から生えてくる鎖を避けるために大きく跳び退く。

そんなふうには追い込んでいるフォワード陣はさらにやる気を出して攻撃の密度を上げていく。

だが、ティアナはその状況に何とも言えない違和感を覚えていた。

……今の状況は私たちにとって良い物のはずなのに、どうして……。

そんなしこりを残しながら、それでも味方の指揮と魔法弾の発射がおろそかにならないのはさすがだろう。

そして、戦況の把握のために隅々まで目を光らせていたティアナは、あるところに目を止めた。

それは、チトセの顔だった。

先ほどもでずつと苦しそうに歪んでいた彼女の顔が、あるとき別の歪み方を、口の端を上げた薄笑いという歪み方をしたのだ。

その瞬間、ティアナは今まで自分の中にあつた違和感の正体に気が付き、叫ぶ。

「スバル！ エリオ！ チトセさんから離れて!!」

その違和感とは、

「彼女、最初の一回以外、あの加速術を使ってない……!!」

直後、スバルとエリオがその場から離れた。

ただし、チトセに吹き飛ばされる形で。



瞬歩でエリオに肉薄しそのままぶつかって突き飛ばし、その反動で反転して後ろにいたスバルを鞘による逆袈裟で吹き飛ばしながら、チトセは思考する。

……様子見はこのあたりでいいか……。

これから戦い方を教える生徒たちの実力を、教師の一人として確かめておきたかった。

だから、最初に少しおどかして、そのあとは一方的な防戦を演じて見せた。

これだけやれば、攻撃の実力は測れる。

一応シャーリーたちから彼女たちの資料は受け取っているが、やはり戦闘能力はナマで見えるに限る。実際に戦えればなお良い。

そんな考えの末の行動だったのだが、実際に測ってみた彼女たちの能力は、

……十分すぎるな。



さすがにエースオブエースが選び、鍛えただけのことはある。個々の才能もあるのだが、何より厳しい訓練についていくだけの根性もある。

……今回はこつちの情報は一切漏れてないから勝てるだろうが、二回目、三回目になるとわかんねーな……。

今回の戦闘では、彼女たちを完全に叩き潰すために全力を出すつもりだ。

そのため、こちらの手もすべて晒す。

自分の倒し方を教える気はさらさらでないが、相手の戦い方から弱点と対処法を判断することぐらいはできて当たり前だ。

今回戦ってみて、それを再確認した。

……だから、一度つぶされとけ。

そうすれば、カガミ式という、言ってしまったえば前時代の骨董品とも受け取られかねない技法に対する油断などは完全に消すだろう。

……そんなものが一片でも残ってたら、必ずやられる……。

五歳のころ、両親の反対を押し切り、その当時は健在だった祖父から教えられ受け継いだカガミ式は、そんな甘い考えでは勝てない。

悪用しない、という固い約束のもとで祖父から教えてもらい、九歳の時に渡されたカガミ式のデバイスを数年かけて少しは扱えるようになり、強い興味を持って祖父と同じ

デバイスマスターの道を行こうと思ひ、研究の日々を重ねた自分だからこそ、はつきり言える。

……今からその一端を見せてやるから、きっちり学び取れ……!

突然変わった私の動きに驚いているティアナを見ながら、瞬歩でバックステップを行い距離を取る。

そして、自分の手の中にある刀を四人の方に掲げながら、

「おめえら、よく聞け。今からあたしの相棒の名前を教えてやる」

……久しぶりに本気の戦闘だ、派手にいこうぜ……!

「——セカンドフォームに移行。——誇れ、『ツバキ』!」



モニター越しに戦闘を見ていたなのは達は、チトセが何かを叫んだのをきっかけに、チトセの周りに風が渦巻き、砂が舞ってその姿を覆い隠すのを見ていた。

「……シャリー、これは……?」

困惑気味に説明を求めるフェイトに、問われたシャリーは説明していく。

「カガミ式のデバイスの内、チトセが使っている刀、同時に、今回盗まれた『ザンパクト

『ウシリーズ』には特殊な機能が付いているんです。まずカガミ式魔法、先ほどの瞬歩などの使用が可能になること。無論無条件で使えるわけではなく、訓練が必要になる物ですし、チトセは適性がなかったのか瞬歩以外はほとんど使えません。これはまあ、普通のデバイスと変わりませんね。使える魔法の種類が違うだけで」

戦闘を観察し、様々なデータを収集しながらシャーリーは話し続けていく。

「そして、これが他のデバイスと『ザンパクトウシリーズ』とを分ける最大の特徴なんです、——このシリーズには形状変化機能が付いているんです」

「……形態変化機能？ だったら私のレヴァンティンも含め、ここにいる全員のデバイスにも付いていると思うが……」

自分の相棒たるデバイスに触りながら疑問を投げかけるシグナムに、シャーリーは首を振りながら、

「確かにそうですね、皆さんのデバイスについているのはあくまでさまざまな状況に適應するための機能です。ですがカガミ式の場合はそうではなく、純粋なパワーアップの為の変形なんです」

その言葉と共に、空間に資料映像を並べながら、

『ザンパクトウシリーズ』の共通点は、形態変化機能がついていること、ファーストからサードまでフォームがあること、ファーストフォームは必ず刀の形をしているという

こと、それぞれに固有の名前とAIがあること……。それだけなんです」

「…………？ それだけって、セカンド、サードフォームはみんな違う形なのか？ ……なん  
でそんな手間のかかる設計を……」

「…………いえ、ザンパクトウシリーズは全て同じ設計で作られています」

呆れたように言うヴィータの言葉を、シャーリーは否定する。

「？ 設計がみんな同じなら、なんでそんなに違いが出るんだ？」

「…………それが、『ザンパクトウシリーズ』のもつとも特徴的な機能であり、先ほどは言  
いませんでしたがもう一つの共通点と言えなくもない機能です。——『ザンパクトウシ  
リーズ』は、所有者によって形も機能も変わるんです」

モニターの向こうでは、チトセの周りの風がだんだんおさまってきて、彼女の姿が  
うつすらと見えてくるところだった。

「ザンパクトウシリーズのデバイスにマスター認証を行った場合、まず最初にデバイス  
自身が所有者の身体能力や思考、リンカーコアの性質などを一気にスキャンするん  
です。そして次に、平均して一ヶ月の間、デバイス自身が自分の構造を組み替え、所有者  
に最適な形に変化するんです。その間は、ファーストフォーム以外は使えません。その  
最適化が済んだら、デバイス自身の判断で、マスターに自身の機能のリミッターでもあ  
る自分の名前を教えます。所有者は戦う際、その名前を呼ぶことでデバイスのリミッ

ターを外してセカンドフォームへシフトさせるんです。その名前も、最適化後のデバイス自身の機能によって決まるため、誰かが使っていたザンパクトウシリーズのデバイスを初期化して他の人に持たせても、全く違う機能、名前のデバイスになります」

「……ねえ待つて。それつて、使う人によって全く戦い方が変わるつてことなんでしょう？　ということとはつまり、ザンパクトウシリーズの所有者には、これと言つて明確な対処法はないつてこと？」

「そうなりますね。何せ使用者全員的能力に共通点を探すこと自体が困難でしょうから」

「……そんな……、それじゃあ、この模擬戦は無意味なんじゃ……」

シャーリーの説明に驚き、この訓練で得る教訓が何もないのではないかと心配するフェイトだったが、

「——そんなことはないよ、フェイトちゃん」

「なのは……」

「確かに、チトセさんと戦つても、わかるのはチトセさんに勝つための戦法だけかもしれない。……でも、だからこそ今みたいなの『相手の情報が何もない状態での戦闘訓練』を行つたんだから。こういう訓練をやっておけば、相手の動きや言動、周りに及ぼす影響など、いろいろな情報の断片から相手の能力や戦い方を推測するという能力が身に付

く。……特に、ティアナみたいな司令塔タイプには重要な能力がね」

「そうですね、だからチトセにはその旨を伝えて、そういう戦い方ができるように戦ってもらってます。今までセカンドフォームを出さずに戦ってたのも、四人の実力を測るという側面もあったのでしようが、そういう考え故の行動でもあるんです」

「そう言葉を結び、シャーリーは改めて状況を見る。」

「——さあ、戦闘が再開します」



砂埃が晴れて、最初にティアナの目に飛び込んできたのは、先ほどまでと何ら変わらないチトセの姿だった。

……セカンドフォームって言ってたけど、大してデバイスの形は変わらないのね……。

彼女の持つ刀の形は変わっていない。強いて言うなら少しだけ刃渡りが伸び、刀身の色があつすらと赤みがかって見えることぐらいだろうか。

そんなふうに見察しているうちに、吹き飛ばされたスバルとエリオが戻ってきた。

「(二人とも、大丈夫?)」

「はい、僕は当て身を喰らっただけなので……」

「(あたしも大丈夫。鞆だったし、防御フィールドの発動も間に合ったから)」

「(そう、ならよかった。キャラも平気?)」

「(は、はい。私は今まで一度も攻撃を受けてませんし……)」

「(ならこつちには実質的な被害はなし、つと。それだけ解れば十分。——つ！ 来るわ

！ 前方に向けてシールド全力展開!!)」

念話で皆の状態を把握しながらもチトセへの注意は怠っていなかったティアナは、彼女が体を少しだけ前に倒し、前に出した足に力を込めたことを見逃さなかった。

その注意の言葉に、スバル、エリオ、ティアナは自身の前にシールドを張り、皆の後ろにいるキャラは他の三人のシールドを強化した。

前面への防御が完成すると同時に、チトセがこちらに向けて突っ込んでくる。

高速移動術は使っておらず、切っ先は前方に向けており、その向かう先は、

「(ティア！ チトセさんの狙いは——)」

「(わかってる！ アンタとエリオはぎりぎりまでひきつけて、彼女の攻撃を私が受け止めた瞬間に攻撃して!)」

「(了解!)」

念話で指示を伝え、チトセが自分に向かってくるのを確かめると、ティアナはシール

ドに全力で魔力を込める。

そうしてチトセの剣による突きを受け止め、配置の関係上ティアナ、スバル、エリオの三人の作る三角形の中に入り込むことになるチトセを背後から二人に攻撃させるためだ。

2人もそれを理解し、シールドへの魔力は最小限にとどめ、攻撃の準備を整える。

だが――

「良い判断だとは思うけど、今回の場合は悪手だな」

つぶやくようなチトセの言葉と共に、ティアナのシールドは簡単に貫かれた。



ティアナのシールドをチトセの刀が何の抵抗もなく貫き、切っ先を胸の真ん中に喰らったティアナが突き飛ばされ、背後にいたキャロに受け止められて、しかし支えきれずに倒れるのをなのはたちは見えていた。

「……シャーリー、ティアナは大丈夫？」



「はい、チトセの非殺傷設定もきちんと働いてますから、今の『ツバキ』は人体に対しては木刀のような打撃武器として作用します。……ですが、今の攻撃が本気だったらティアナは死んでますね……」

「そうだね。……まあ、これもいい経験かな?」

少し悲しそうな表情を浮かべながらつぶやくのは。

そんな空気を変えさせようと、フェイトはシャーリーに聞く。

「……ねえシャーリー、今のチトセさんの攻撃って……? シールドを砕かないで貫くなんて普通はできないと思うんだけど……」

「あれは、チトセのデバイス、『ツバキ』のセカンドフォームの能力です。その効果は――」

司令塔だったティアナを文字通り突き飛ばし、訳の分からない事が起きて呆けている残りの三人に少しばかりあきれながら、チトセはフォワード陣の包囲から飛び出し、5メートルほど離れたところに降り立った。

「おいおいおめえら、いくらなんでも驚きすぎだろ。魔法が無効化されるなんぎ、AMF

使う機械相手にしてたんなら見慣れてるだろうが」

あたしの放った言葉に我に返ったスバルとエリオはティアナのもとに駆け寄ろうとするが、すぐに驚いた顔をして立ち止まる。そのあとすぐにすまなそうな顔になったことから、念話で『こつちに来るな』、『集中しろ』、『なんでさつき攻撃しなかった』などと言われたのだろう。

……正論なんだがな。まあ、頭でわかっているもできないことってのはあるよなあ。そんなことをしみじみ思いながらも、表情には出さないようにする。

自分から差し出した情報ならまだしも、それ以外の私的なことまで見抜かれるのは嫌だったからだ。

だから、自分の顔に作った笑顔を貼り付け、『ツバキ』を掲げながら言う。

「……おめえらの大将がそのざまじゃあ少しの間は戦えねえよなあ。だったら少し紹介してやるよ。あたしの相棒、『ツバキ』だ。よろしくやってってくれ」

『よろしくお願ひしますわ、若き戦士たち』

ツバキのA Iのお嬢様のようなしやべり方は少々気に食わないが、もう長い付き合い合いなので慣れた。

それにまあ、自分なような乱暴なしやべり方の女には、こういう話し方の相棒でちようどよかったのではないかとも思えてきている。

……にしても、初見とはいえ随分簡単に喰らったな。ま、少しぐらい待つてやるか……。

こちらが油断していると見せかけて、四人に体勢を立て直す時間を与えてやる。

……こんなだまし討ちで終わらせるのは詰まらねえしな。

「……少しだけ、教えといてやる。カガミ式デバイスの『ザンパクトウシリーズ』は、三つの形態がある。一つは、さっきまで使つてただの刀、『ファーストフォーム』。二つ目が、今使つてる『セカンドフォーム』。そして、この後にもう一つある『サードフォーム』。この内セカンドフォームからは、なんかしらの特徴が出てくる。あたしのツバキも例外じゃない。……ま、それが何かを教えたりはしないがな」

『まあ、意地の悪い。少しぐらいサービスしてあげても良いじゃないですか』

「もう十分だつて。あんまり大安売りするのはいい女じゃねえぜ。女はミステリアスなのがいいのさ」

『あなたに女のなんたるかを語られるなんて、この子たちがかわいそうですわよ』

「あん？ どういう意味だツバキ？」

『そのままの意味ですわ。——そんなことより、もうこの子たちは大丈夫そうですわよ？』

「ん？ ……ああ、そうみたいだな。やる気十分つて感じだ」

『ツバキ』の言葉の通り、四人はすでに一番最初の陣形に戻り、こちらを警戒している。……こつちが油断しているうちに攻撃してくるならまだかわいげがあるんだがな……。真面目なのか、警戒心が強いのか……。……どっちもか？

まあ自分ならばツバキと話しながらも戦えるが、それは置いておくことにして、「さあて、それじゃあ引き続き、行ってみようか!!」

『ええ、久しぶりに空腹を満たせそうですわ!』  
とりあえず、四人を喰らいつくそうと思う。



ティアナは、自分の出した合図と共にエリオとスバルがチトセに向かっていくのを見ていた。

先程の衝撃から何とか立ち上がり体勢は立て直したものの、ティアナの体にはかなりダメージが残っていた。

それでも戦えているのは、きつい訓練と数多くの戦いを潜り抜けてきたが故だ。

……その点だけは、スカリエツティにも感謝できるわね……。

そんなどうでもいいことを思いつつ、皆に指示を出し続ける。

とりあえずの課題は、チトセのデバイス、『ツバキ』の能力を見極めることだ。だから、チトセの動きから一切目を離さず、どんな些細なことからも情報を得ようとする。

……スバルのリボルバーナックルによる打撃や、マツハキヤリバーによる蹴りは普通によけたり鞘で受け止めたりして……。

だが、時折撃ちこむ自分の魔法弾は全て軌道上に刀身を持ってこられ、かき消されてしまっている。

……本当にAMFを積んでるの？ でも、エリオの雷も打ち消してるし……。

魔力変換資質によって魔力から別の物に変えられたものもはや魔力ではないため、本来ならばAMFによって打ち消されることはない。それに、自分のヴァリアブルシールドも無効化されてしまった。

……ということとは、もっと別の能力ってことになるけど……。……駄目ね、何も思いつかない……。

こういう時は別の視点からの考えを聞いてみるのが一番だ。

なので、自分の後ろにいるキャロに意見を求めてみる。

「キャロ、彼女のデバイス、『ツバキ』の能力って、なんだと思う？」

「私にもよく……。でも、AMFによる無効化とはなんとなくですけど違うと思いま

す。なんて言っていないのかわかりませんが、AMFの場合は魔力の結合を解かれてバラバラにされてしまう感じなんです。でも『ツバキ』の場合は、乾いた砂に水をこぼしたみたいに、すうつと吸い込まれていく感じ、というか……」

……確かに、そうよね……。

チトセがこちらの攻撃を無効化しているところを見ると、自分もそんな印象を受けた。

「いまいち確証のないあいまいな感覚だったため判断材料から外していたが、キャロもそう感じているのなら間違いはないのだろう。」

『吸い込まれる』。

なんだかわからないが、この言葉がカギのような気がする。

……吸い込まれる、……吸う、……呑む、……呑みこむ？

言葉の連想の中で、ティアナはある可能性にたどり着く。

……もしかして……！

そういえば、と、彼女とデバイスの会話の中で妙な言葉があったのを思い出す。

——『ええ、久しぶりに空腹を満たせそうですね！』

……空腹って、デバイスに食事なんてあるわけない。だったらこれは、彼女たちの間だけで理解できる何らかの比喩ってこと……。

——今までの現象、吸い込まれる、呑みこむ、空腹……。

これまでに見つけた情報の断片をつなぎ合わせて仮説を立て、今まで起こったことにあてはめて矛盾がないことを確かめていき——

「わかったわ!! 彼女の『ツバキ』の能力は、『エネルギーの吸収』よ!!」



「『エネルギーの吸収』。それがツバキの能力です」

「『エネルギーの吸収』? ……それって、じゃあ——」

「ええ、さっきのはシールドを構成する魔力を吸収したんでしようね。だから簡単に貫けた。……というより、刀が触れた瞬間に魔力が吸われますから、貫いたというよりもないも同然、と言った方が正しいでしょうね。やられる本人からすれば、AMFをまとった武器と戦っているのと何の違いもありません」

「でも、AMFとは違う。AMFなら魔力の結合を無効化するだけけど、『ツバキ』の場合は『エネルギー』、つまり魔力変換で出現させた雷や炎なんかも電気、熱のエネルギーとして無効化できる、ってことだよね?」

「はい。さすがに氷なんかはエネルギーじゃないので無理らしいですけど……。——

そして、『ツバキ』の能力は『吸収』。つまり——」

「奪った力を自分の物にできる、ってこと？」

「そうです。奪ったエネルギーは刀身に蓄えられるんですけど、そこから相手にたたき返したり、斬撃に付与させて飛ばすこともできます。あと、さすがに熱や電気などのエネルギーは無理ですけど、魔力ならば問題なく自身に取り込めます。変換効率はそんなに良くて、せいぜい50%ほどだそうです……」

「相手が魔法を使う限りは魔力切れはない、ってことかな。本当に、『魔導師殺し』って感じの能力だね」

そんなやり取りをしながら、彼女たちは模擬戦の様子を見続ける。

……ほんとすげえな、こいつ……。

多少手心を加えていたとはいえ、たったこれだけの時間と情報で、しかも戦いながら理論を組み立てて自分のデバイスの能力を見抜いたティアナに対し、チトセは素直にそう思った。

あたしも含め皆に聞こえるように叫ばれた『ツバキ』の能力の予測は大体があつてい



る。

……しかも、念話じゃなくて実際に口に出すことであたしの動揺を誘ってるってころなんかホントタチ悪いな……。

そんな思いとは裏腹に、あたしの顔は緩み、心は躍る。

その思いを動揺ととったのか、テイアナはその隙をついてくるように前衛の2人を指揮して、魔力放出系の戦法を封じて直接攻撃を仕掛けてきている。

……良いねえ。すごくいい……。

本来戦闘狂の類ではないあたしだが、今回ばかりは楽しいと心から思う。

……ここならあたしは最高に輝ける……！

ザンパクトウシリーズの所有者にとって、そのデバイスのAIは自分の魂の現身うつしみであると、あたしは思う。

そして、その能力は自分の魂の輝きである、とも。

科学者としては失笑物の考えであることはわかっているが、そう思えてしまうものは仕方ない。

……だから、こういう戦いの場は大歓迎だ！

最近、『ツバキ』をふるうことは鍛錬以外ではほとんどない。

せいぜいが、近くに現れた猛獣を追い払う時くらいで、それもファーストフォームで

事足りる。

……そんなんじや、あたしは輝けない……!!

『ツバキ』があたしの魂の現身であるならば、私の魂は自分を誇ることによって輝きを増すと  
いうことになる。

……だけど、それに気づくまでが長かったな……。

戦闘中にはあるが、少しだけ昔の自分の事を思い出した。



## 下

物心つき、学校などの集団生活に身を置くようになってから、あたしは皆から距離を置かれていた。

理由は簡単で、あたしの見た目と性格の違い故の事だった。

あたしは見た目だけは淑女だ。それは自覚している。

だけど、一度口を開けば、出てくるのは乱暴な言葉ばかり。

外見しか知らない奴は近寄りがたいと言って距離を置き、近寄ってくるような勇気のある奴もあたしと少し話しただけですぐに距離を取った。

自分を無理矢理押し殺すことも考えたが、それは何かが違うと思った。

そんな毎日が続き、あたしはだんだん不安定になっていく。

ずっとそんな生活が数年続いた、ある日のこと、病に苦しむ祖父の寝所に呼ばれた。

祖父には今までも週に一度は会いに行き、今まで最近自分の身の回りで起こったことを話していた。

祖父に心配をかけたくはないと幼心ながらも思っていたため、必然的に学校の話は少

なくなっていたが……。

そんな祖父が、いつもは自分から会いに行くだけの祖父が自分をわざわざ呼び出したのには少々驚いた。

そんなことを考えながらも祖父に会いに行くと、いつもよりやつれて見える祖父が、あたしに細長い包みを差し出してきた。

解いてみると、それは一本の刀だった。

それまでも祖父にデバイスについていろいろ教わってきたあたしには、それが『ザンパクトウシリーズ』であるはずにわかった。

本来ならばそれは、管理者に認められなければ持つことは許されない物だ。

その時点での管理者は祖父であり、その時あたしは祖父の立会いの下、その刀にマスター認証を行い、また管理者の任を受け継いだ。

とはいえまだまだあたしは子どもだったから、しっかりした思考ができるまでは他の『ザンパクトウシリーズ』の管理は父にゆだねられ、あたしが管理するようになったのはつい最近の事だった。

そんなことがあり、あたしは自分だけのデバイスを持てたことがうれしくて舞いあがりながら祖父のもとを後にした。

その次の日の朝、祖父が息を引き取った。

当時は『昨日まで元気だったのに』と訳が分からなかったが、今から思えば祖父は自分の死期を悟り、そしてあたしの事を思つてあたしを次期管理者に指名したのだろう。

そんなこともわからず、あたしは一日中泣き続け、泣きやんでも気分は落ち込んだままだった。

それから数週間、あたしは落ち込みっぱなしで、いろいろ気分転換させようと頑張つていた両親の気遣いもすべて無視していた。

そしてそんなある日、最初は現実逃避で始め、もはや日課になっていたデバイスの手入れの最中、デバイスがいきなりあたしに語りかけてきた。

『初めまして、チトセ。……あら、なんでそんな暗い顔をしていらつしやるんですの？』と。

いきなり声が聞こえたことにも驚いたが、その時刀身に映つたあたし自身を見て、愕然とした。

今までも鏡を見るたびにそんな顔を見ることはあつたし、この数週間はこんな顔しか見なかった。

だが、デバイスに触つてるときだけは、そんな気持ちを忘れられているはずだった。

なのに、なんで自分はこんなにつらそうな顔をしているのだろう。

なんで自分は、大好きなデバイスを、こんな顔でいじっているのだろう。

そんなあたしを救いだしたのは、その手の中にあるデバイスだった。

『わたくしのマスターであるあなたが、そんな顔をするのはおやめなさい!!』

無理だと思った。

今まで自分の事をきちんと見てくれ、自分の目指すものを後押ししてくれた祖父がいなくなってしまったのだ。

ありのままの自分を受け入れてくれる人は、誰もいなくなってしまった。

今いるのは、本当の自分を認めようとしない人たちばかり。

そんな中でこれから先、どうやって自分を保てば良いのかわからない。

そんなことを話すと、手の中にあるデバイスは存在しないはずの鼻で『はん!』と笑い、

『なにをバカなことを……。自分を証明できるのは自分だけだと、そんなことも知らないようではわたくしのマスターたる資格などありませんわ!!』

そして畳み掛けるように言葉をつなげてくる。

『偽りのあなたを認められてうれいのですか? 本当のあなたを見ようもしない愚か者どもに嫌われたら悲いのですか? 誰かに見られていなければ自分の保ち方もわか

りませんか？——そんなものは、自分に自信を持たない軟弱者のセリフですわ!!」

「じゃ、じゃああたしはどうすれば……」

『自信を持ちなさい。自分の能力や容姿だけじゃなく、自分の生き方、思い、今まで生きてきた過去、今の自分、そしてあなたが進んで行く未来まで、すべてに自信を持ち、誇りなさい。あなたの中の何かを誇るのではありません。あなたそのものを誇りなさい。例え他人があなたを蔑もうとも、あなたを否定しようとも、あなただけは自分を信じ、自分を誇って前に進み続けなさい。その途中であなたの誇りに傷をつける者がいれば、その者の誇りとあなたの誇りをぶつけ合いなさい。勝てばあなたの誇りが上。もし負けても、あなたよりもさらに上質な誇りを持つ者に出会えたのだと、そんな自分を誇り、その相手の誇りを認めなさい』

力強い言葉だった。

今の自分では到底出せない、そんな言葉だった。

でも、同時にともうらやましいと思ひ、憧れた。

こんな声を出せて、自信にあふれた生き方をする人間になりたいと、心から思った。『無論、あなたの生き方はあなたの生き方です。無理強いはいたしません。私の言葉が悪魔のささやきだと思ってくれても結構。……ですが、今のままのあなたでい続けることは、あなたの事を唯一認めてくれた御祖父殿に失礼なことであるとも知りなさい』

その言葉に、あたしは心臓を貫かれたような気がした。

あたしは祖父に、あの優しく、あたしの事を心から応援してくれた、あたしの大好きだったおじいちゃんに、恥をかかせてしまっていたのだと、知ったからだ。

もし祖父が生きていて今の自分を見たら、きっと悲しむだろう。

そんな顔は思い浮かべたくもない。

おじいちゃんには、いつもの笑顔でいてほしい。

そして、立派なあたしの姿を見て、誇りに思っしてほしい。

だから、あたしは……、

「あたしは、もう負けない」

『何に、ですか?』

「あたしは、もう他の人からの攻撃には負けない! 心も体も、すべてにおいて、あたしは強くなる! あたしは、おじいちゃんの誇りなんだ! そんな自分を誇っていたんだ!! だから、あたしはもう負けたくない。周りのみんなの言葉にも、勝手な失望にも、偽りの自分にも、絶対に負けたくない!!」

『……ですが、今のあなたにそれができますか?』

その言葉は、疑問の内容とは裏腹に、なんだか楽しそうなものだった。

「確かに、今のあたしじゃ無理。力も知識もないし、自分を押し通す勇気もない。あるの



はちっぽけな誇りだけ」

『それでは、どうしますか?』

「……だからお願い、力を頂戴。誰からも、どんな状況からも、今はちっぽけなあたしの誇りを守り、大きく育てるための力を頂戴。いつか、みんなに示せて、みんなの憧れとなるような、そんな誇りを持てるだけの力を!!」

私のその要求に、刀は笑って応えてくれた。

『……よくぞ言いました! それでこそわたくしのマスターです! さあ、あなたの望んだ力を、あなたの誇りを育てるための力を差し上げましょう。よく覚えておきなさい。その力の、わたくしの名前は——』



右から来た槍の一撃を、身をかがめることで髪を数本切り取られながらもかわす。

「なあ『ツバキ』、あたしは今、輝いているかい?」

身をかがめた自分を狙って来たスバルのローラーシューズ付きの蹴りを、斜めに構えた鞘を盾にして受け流す。

『当然ですわ。なんたって、わたくしのマスターですもの』

すると足もとにピンク色の魔方陣が浮かび、鎖が飛び出してきてあたしを縛ろうとするが、それをそこから飛びのくことで回避する。

「……そうか。そうだよなあ。だったら、あいつらにもあたしの誇りを見せつけてやろうや！」

空中で身動きが取れないところに刀身をよけて飛んできた魔法弾を、無理やり体をひねって切り捨てる。

『そうですわね。……わたくしの名前は『ツバキ』。例え香りはなくとも、不吉と言われようとも、誰かに切られようとも、地中の、太陽の、大気の、水の、全ての力を糧として、大輪の花を咲かせそれを誇る。そんな花の名前ですわ』

槍についている加速器で空を飛んで突っ込んできたエリオに今まで吸収した魔力による斬撃を飛ばして体勢を崩し、回避。

「知ってるよ、なんだってあたしは、あんたのマスターなんだからな」

『ツバキ』を振り切ったところに、四方八方から魔法弾が同時に着弾するように打ち込まれてきたので、足に魔力を集中して擬似的な足場にして適当な方向に突っ込み、軌道上の魔法弾を吸収しながら包囲網から抜ける。

『ふふ……、そうでしたわね。——ならばわたくしの名の由来、あの方たちにもとくと教えて差し上げましょう！』

牽制のために吸収した魔力弾をティアナの方に斬撃として送り返し、そのまま大きく飛んで距離を取り着地して、

「おうよ！ それじゃあサードフォーム、行ってみようか!!」

己の最大の誇りを発揮した。



モニターに映るグラフから、チトセの魔力数値が爆発的に増加するのを見て、シャーリーはつぶやく。

「ふうん。チトセつたら、もう出すんだ……」

同時に、戦闘中の音声を聞いていたフェイトがシャーリーに気になった単語についてたずねる。

「シャーリー、サードフォームって？」

「サードフォームというのは、文字通り三番目の形態のことです。『ザンパクトウシリーズ』においてそれは最終形態であり、何より威力がセカンドフォームに比べて5倍から10倍に跳ね上がります」

「10倍って、そんなに!?!」

「……まあその分魔力も多く消費しますし、扱いも難しくなります。しかも、使うには少々厳しい条件もあるんです」

「……条件、つて？」

「デバイスからの許可が必要なんです」

「許可？ 普通そういうのはデバイスマスターとか、そういう人たちが出すものじゃないの？」

「確かに普通はそうなんです……。『ザンパクトウシリーズ』には固有のAIがある、ということとはさつき言いましたよね？ そのAIが、同時にリミッターの役割も果たすんです。彼らはミッド式やベルカ式のデバイスに比べてかなり感情豊かで、『ザンパクトウシリーズ』の使用者はその人格に気に入られて力を貸してもらっている、という形をとっているんです。だから、デバイスにいくら命令しても、自分の力を振るうにふさわしくないと判断されれば、セカンドフォームすら発動できません。逆に気に入られていれば、すぐにでもサードフォームのリミッター解除用のキーワードである、サードフォームの名前を教えてもらえます。……まあ、大概のAIは判断基準が高いので、そこまでいくのに早くて数年かかるそうですし、一生サードフォームを会得できない人も数多くいたそうです」

「そうなんだ……」

「そういう制約がある分、威力は本当にすさまじいですよ。たぶん、今の四人じゃまず勝てません」

「そんなに強いんだ、『ツバキ』つて……」

「まあ、相性の問題もありますしね。そういうことでいえば、ティアナなんかはチトセ相手にはまず勝てませんよ。魔法弾はほとんど効きませんし」

「じゃあ私もだめかな。私の魔法も魔力弾と砲撃ばかりだし」

「あたしのアイゼンは大丈夫だろうな。魔力は威力強化にしか使ってねえし」

「私とバルディッシュもきついかな。雷も魔力刃も吸収されちゃうし」

「私とレヴァンティンは、単純な剣の打ち合いならば大丈夫か」

『いやでもそれは』、『……いや、そういう場合はむしろ……』など、真剣に話し合いを始めてしまった四人をみて、シャーリーは苦笑する。

「あはは……。みんなチトセの対処法考えちゃってる……。……こんな隊長たちに鍛えられたんだから、少しはいいところ見せなきゃね、みんな？」

ティアナは、チトセからものすごい量の魔力を感じた。

……まずい、ナニか来る……!!

急いで全員に何が来てもよけられるようにと指示を出す。

防衛させようとは思わない。彼女の攻撃は物理的な防衛以外は全て抜けてくるし、それ以前に何だかわからない物は受け止める方が危険だと、最初の一撃で思い知った。

……最悪、今まで吸い取った魔力を上乗せした広域魔力砲なんてものが来てもおかしくない……。

その場合に備え、キャロに転送術の準備をさせておく。

他にもいろいろな対策を立てていると、チトセに動きがあった。

彼女は腰を落とし、『ツバキ』を下段に構えると、

『ツバキ』、サードフォームへ移行。咲き誇れ、『リヨウランツバキ』!

そう叫びをあげ、魔力を大量に込めた『ツバキ』を、

——はるか上空へと放り投げた。

………は？

チトセの手を離れた『ツバキ』は、くるくると回転しながら空高く昇っていき、見えなくなった。

戦闘中にデバイスを捨てるといふ暴挙にしか思えない行為を見せることに何の意味があるのだろうかと考え、

……まさか、私たちの気を逸らすために……！

彼女の脅威の内、一番大きい物はなんといつても『ツバキ』だ。

戦闘中は常にそれに意識を向けていかざるを得ない。

それをいきなり遠くに捨てればどうなるか、答えは簡単だ。

……私たちの意識はそちらに向き、彼女自身はノーマークに……！

その隙はあまりにも大きい。特に、高速移動術を持つ彼女のような魔導師ならばなおさらそう感じるだろう。

一瞬でそのことに気が付いたが、少なくとも一瞬はかかってしまっている。

その間に彼女ならば四人の内二人ぐらいはノックアウトできる。

四人そろっていた時点で押され気味だったのだ。今人数を減らされれば確実に負ける。

……なんてこと……！ 生き残ってるのは……！

おそらく最初にやられたのは前衛の2人だろうが、生きているのならばそこから立て直そうと思ひ、状況を確認する。

まず、スバルは、

……あれ？ 生きて……、って言うより襲われてすらいない……？

視線の先にいる自分の親友は、いまだに不思議そうな顔で空を見上げている。

その様子から、攻撃を受けたような感じはない。

その隣には同じように空を見上げているエリオの無事な姿も確認できた。

それにとりあえずはほっとして、そしてすぐにもう一つの可能性に気が付く。

……まさか、フルバックのキャラを先に……！

まずサポート役であり戦力のブースト役でもあるキャラを戦闘不能にして、それから弱体化した三人を倒すという作戦は、理にかなっている。

もう間に合わないとは思いつつも、せめてリカバリーが可能な状態であってほしいと願いながら振り向けば――

「――あの、ティアナさん。これっていったいどういう状況なんですか……？」

困惑の表情を浮かべたキャラがいた。

……あつれ……？

「どうも先ほどから自分の予測が外れまくっている気がする。この世界は私を見捨てたのか？」



ともあれ全員無事なのは確認できた。となるとなぜ無事なのか、という疑問が浮上してくる。

その疑問を解消すべく、どうせもういないだろうと優先順位を低くしていた先ほどまで彼女がいた場所を見てみると――

「――なんで、まだそこにいるのよ……？」

チトセが刀を放り投げた場所にいまだに立ち続けているのが見えた。

彼女はしばらく何か考えているようにじつと自分の武器が消えていった空を見ていたが、ふと前を向き、今まで左手で持っていた鞘を腰に差し直した。

そしておもむろに自身の右手で左手をつかみ、頭の上に持つていくと体を右に傾け、体を伸ばし始めた。

少して手を組み替え、鏡写しの運動を行ったかと思えば、次は前後屈運動、さらにアキレス腱伸ばしをしながら手首を回し始めて――

「――あの、いったい何をやってるんですか……？」

いい加減にじれてきたし、訳も分からないので質問してみることにした。

それに対しチトセは何でもなしのように、

「いや、これからちよいと激しい動きをするから念のために、な」

と返してきた。

『はあ……』とあいまいに返すしかない自分に、周りにいる三人から『何がどうなってるの?』という念話が飛んでくるが、そんなものは自分が聞きたいぐらいだ。

そんな感じで困惑が頂点に達してきた頃、

「……なあ、お前ら。やる気あんのか……?」

唐突にチトセから質問が来た。

その問いはあまりにも失礼なもので、ムツとしたティアナはいまだに体操を続けているチトセに、

「少なくとも、いきなり武器を放り投げて無手になった上に柔軟を始めるあなた以上にはあると思いますけど?」

と言いつ返した。

「ふうん……。そりゃよかった。だけどよお、じゃあなんでお前らはあたしに攻撃してこない?」

ティアナを含め、四人は言葉を失った。

「なあ、なんでだ? 今あたしはお前が言った通り無手だ。しかも柔軟なんてやってて無防備にもほどがある。なのになんで攻撃してこない? なんでこつちの準備が整うのを待っている? ……あたしにやあ、お前らにやる気があるようには見えねえなあ」

「……それは……」

「相手の準備なんか待たなくていい。相手は待つてくれねえんだから。相手を倒すのに気を抜いていいわけがない。抜けば死ぬだけだ。……それがわからないほど、お前たちのいた戦場はぬるい物だったのか？」

「……………」

そんなことはなかった。

今まで自分がいたのは、犯罪者を相手にする世界だ。

当然のように非殺傷設定をしている自分たちとは違い、相手は殺傷設定でも構わず攻撃してくる。

現に自分の兄とて犯罪者に殺されたではないか。

そんな世界にいる者が、そんなことを考えていいわけがない。

「いいか？　これからお前たちが戦うカガミ式つてのは、スロースターター型が多い。いちいち相手の出方を見ていたら勝てない。相手のやり方から相手の戦術を見抜くのも確かに大切だし、その能力があることも認める。けどな、別に相手の能力を見破らなきや倒しちやいけねえつてわけでもない。確かに罠つて可能性もあるだろうが、そんなのは見破ろうが見破つていなくなるのが同じだ。隠し玉つてやつはいくらでも出てくるもんだしな。だから、お前たちには今のあたしにも攻撃できるようになってほしかった。実際今のあたしは本当に無防備だったんだからな。攻撃されりゃあ簡単に終わっ

てたぜ。なあ、お前たちにはいい先生がいるんだろう？ いい目標がいるんだろう？ シャーリーから聞いているぜ？ 機動六課には、最近魔王にランクアップした怒らせるとピンク色の砲撃が飛んでくるっていう管理局の白い悪魔とか、脱げば脱ぐほど強くなるっていう変態じみた雷光の死神がいるって。ぶっちゃけあたしも見られるかと期待してたんだが、今日は休みなのか？」

全員急いで目を逸らした。



「ふうん……。シャーリー、随分面白い話をしてるんだね？ ……もっと詳しく教えてくれないかなあ？」

「えっ！ いやあの、なのはさん？ なんでそんなに怖い顔を……？」

「……シャーリー？ 私たちの事そんなふうに……？」

「いえあのフェイトさん？ これはですね、ほんの冗談で……。だからあの、別に他意はなくてですね……。というか自覚有ったんですか二人とも!？」

「……おしおきだよ……！」

「きゃー……!!」

「おい二人とも、落ち着け」

「——っ！ シグナム副隊長……！」

「そうだぞ二人とも、今は冷静になれ」

「ヴィータ副隊長も……！」

「シャーリーの事だ、どうせ私たちの事もいろいろ言っているに決まっている」

「だからあたしたちが尋も……、もといOHANASHIでできる程度に手加減しとい  
くれ」

「……了解……！」

「いや————！！ チトセのバカー————！！」



ティアナは聞く、彼女の話をも。

遠くの方で爆発音が聞こえたが、何かあったのだろうか？

まあ今はそんなことはどうでもいい。

「……お前らが負けるってことは、お前らの師の顔に泥を塗るってことだ。それは嫌だ  
ろう？ だったら、負けの確率は最小限にとどめなきやいけねえ」

チトセの言っていることはわかる。だが、それをやってしまえば、自分は……。他の三人も同じ思いのようで、皆嫌そうな顔をしている。

それを見てチトセは仕方なさそうに、しかし少しうれしそうに笑いながら、

「別に卑怯な手段を使えって言ってるわけじゃない。そんなのはあたしも嫌いだ。ただ、そういう搦め手も覚えていかないとこの先つらいぞ、と、そう言いたいんだ。覚えておけば何かと便利だ。使わなくてもいい、覚えておけ。そうすれば相手が使ってくるも対処できるからな」

『さて、と』とチトセは続け、

「そろそろ再開と行こうか。……こっちの時間稼ぎももう終わるしな」

……ええ、そんなのあり……？

なんだか裏切られた気分だが、とりあえずすべては自分たちを導くためなのだと思得しておく。

もう終わる、という言葉に反応し、すぐに動き出そうと皆に指示を出そうとするが、

「——おい、悪いことは言わねえから、そこから動くな」

という言葉がかかる。

また『揺らし』に來たのだと判断し、これ以上の不覚を取るまいと構わず動こうとするが——

「……聞こえなかったのか？——動くな！」

その声に、そしてその声に込められた覇気に、動きを止められた。

そしてその直後、ティアナの視界が銀の線に真つ二つにされた。

「……え？」

それは先ほどから散々見てきた刀であった。

いきなり現れ、前に飛び出そうと前傾姿勢だった自分の目の前数センチの位置に突き刺さっているそれが、いったいどこから現れたのかと考え、

……まさか、さつき投げたのが、今になって……？

その考えに至り、ふと見上げた空に、いくつもの光が見えたような気がして——

「——っ！ 全員、上空よりの飛来物を全力で回避しなさい!!」

その直後、青く晴れた空から、赤みがかかった銀色の雨が降り出した。



ティアナの声に他の四人が空に目を向けてからすぐに、空から幾本もの剣が降り注い

できた。

『村雨時雨』、つてのは少し語呂が悪いかねえ……』

そうつぶやいたのは、あたしのすぐ横に一振りの刀が突き刺さってからだ。

そのつぶやきに、落ちてきたばかりの刀から声が返ってくる。

『あら、良い名前じゃありませんの。……まあ、わたくしの名前が入っていないのが少々不満ではありますけど……』

「でもよお、この技はソードフォームでしかできねえし、この状態のお前の名前は『リョウランツバキ』だろ？ それを入れるとなるとすこーしばかりやりづらいぜ？」

『だったら『ツバキ』だけでも入れればよかったのではなくて？ ……大体、刀っぽいし韻も踏んでいるから、という理由であの名前にしたのでしょう？ だったらいつも通りそれに誇っていいでしょうに……』

「……そりやそうだけどさあ。でもあれ、刀を上空で分裂させてそのまま落としてるだけだぜ？ 上空での出現場所とタイミングを調節することで落下地点や狙いのある程度決められるとは言っても、準備に時間がかかるわ落ちてくるまでの間無防備になるわ、欠点だらけじゃねえか。普通の戦闘中じゃ使えねえし、奇襲に使うにしたって魔力の消費が激しすぎて割に合わねえし……。ただ単に『どうやったらなるべく派手に戦場に刀をばらまけるか』つていう考えを一晩でまとめあげただけのもんだ。やっぱり別の



案を考えようや」

『あなたがそう思うのならばそうなされれば良いと思いますけど……。でもこれはなかなか派手ですわよ？ これでも十分誇らしいと思いますけど……。？』

「でも、現状で満足してちゃあいつか枯れちまうだろう？ いい女つてのは、いつなんどきでも前に進む努力を欠かさねえもんだ。違うか？」

『——ふふふ、ええ、確かにその通りですわ。久しぶりにあなたに一本取られましたわね』

「ああ、人間じゃねえくせにいい見本になるやつが近くにいるもんでなあ」

『あら、それは幸運でしたわね。その方を大切になさいますか？』

「ああ、言われなくてもそうするさ」

そんなことを話しているうちに、剣の雨も終わりに差し掛かってきた。

上空から迫る銀色に対し、四人はほとんど動いていない。

「……そうだ、それでいい。誘導が効いてない範囲攻撃は下手に動いたって意味はねえ。なるべく動かず、自分に迫ってくる奴を片っ端からたたき伏せていくのが最善だ。……もつとも、最初に落下位置を設定するときにあいつらのいる辺りには落ちないようにしてたから、そのまま突っ立ってただけでよかつたんだけどな」

『いやあ、ティアナが動き出そうとしたときには焦ったぜ』とかぼやきながら、ついに

突然の豪雨を耐えきった四人にねぎらいの言葉を贈る。

「いやあお疲れさん。どうだ、スリル満点だったろう？ こいつはあたしのデバイスのサードフォーム、『リョウランツバキ』の能力の一つでな。その名も『無限複製』ってんだ。読んで字の如く、無限に複製を作れる能力さ。ちなみに今回は1024本作ったぜ。作れるのは刀のある位置から半径2メートル以内の空間だが、2メートル前に作り、新しく作ったやつを基準にしてまた新しく作って、つてのを繰り返せば実質どこにでも作り出せるってことになるな。ちなみに、『ツバキ』だった頃の能力である『エネルギー吸収』も全部の刀にきちんと残ってるから安心しとけ」

その言葉に絶望的な表情を浮かべる四人だが、ティアナはすぐに顔を引き締め、

「まだよ!! いくら武器が増えたって扱うのはチトセさん一人だけなんだから、彼女の動きさえよく見ていれば勝てるわ!! だからやることは今までと同じ、とにかく隙を突いて一撃決める! それだけよ!!」

そう言い放ち、皆の顔も引き締めさせる。

……イイねえ、最高だ。こりやあ将来化けるぜ……!

下がりかけた士気をあつという間に戻し、さらには今まで以上にしまったティアナの能力に、チトセは感心していた。

……それでこそ、叩き潰し甲斐があるつてもんだ……!

そう感じ、そしてその思いのままに動くことにする。

「いくぜ、口だけ女」

『ええ行きましよう、私の胃袋』

「へえ、言うようになったじゃないかこの大喰らい」

『自慢出来るのは口だけなもので、この残念美人』

「お前までそれを言うか！」

なんだか締まらなくなつたが、それでもチトセは前に進む。

なぜなら、その方が輝けそうだから、だ。



チトセがこちらに向かつてくるのが見える。

現在、ティアナの周りは刀が何本も刺さっている。

それぞれの刀は大体二メートル間隔で均等に刺さっており、移動するのに少々鬱陶しいぐらいだ。

それでも一応念のため、先ほど小さな魔法弾を一つ作って近くの刀に当ててみたが、

……普通に吸収したわね……。

つまり、この刀の林の中では、魔法弾はよっぽどうまく扱わなければ意味がない、ということだろう。

もちろん、自分ならば動きもしない止まった障害物の間を縫って魔法弾を飛ばすのは簡単なことだが、その苦勞はおそらく意味がない。

普通の徒競走と障害物競走。

同じ距離を走る場合、どちらが早いかは明白だろう。

この場合でもその法則は適応される。

今まで何も無い空間を挟んだままで、つまりは徒競走で競つても普通に魔法弾を打ち消していたチトセの事だ、障害物競走の速さでは脅威にも感じないだろう。

……なんにせよ、ここから離れたほうが良いわね……。

この剣の林は私たちを中心に展開されている。

この中にいる限り、たとえば彼女の武器を手から離れたところで、すぐに代わりを手にするだけだ。

だったら自分は何をすべきか。その答えはもう決まっている。

……少しずつでもいい、この場所から彼女を引き離す……！

ここは彼女が整えた彼女のためのフィールドだ。そんな場所で戦つたところで勝てるわけがない。

だから、勝つことは二の次にして、なんとか負けないように、撃墜されないようにしながら彼女を少しずつここから追い出していく。

……とりあえずは、私たち自身がここから離れて行く。

そうすれば、近接攻撃が主である彼女は追ってこざるを得ない。

遠距離用の技もあるにはあるが、それは刀身から魔力を斬撃として放つ物であり、その程度ならば今の自分たちのシールドやプロテクションで防げることは実証済みだ。

真に恐れるのは刀身による直接攻撃のみ。

だったら、下手に攻め込んだりせず、距離を取って戦って行けばいい。

まずは、前衛であるスバルとエリオに彼女の足止めをしてもらい、機動力がない後衛の自分とキヤロはその隙に少しでもこの林の中心から離れる。

そして、彼女がこちらに向かってきたら機動力のある二人に合流してもらい、四人で足止めをする。

また隙ができたら、スバルとエリオに足止めを、というように繰り返して行けば、最終的にはここから出られるだろう。

……そうすれば、あとは彼女に武器を複製する隙を与えないようにしながら武器を奪って、終わり。

とりあえずの作戦が決まり、その旨を他の三人に伝え終わった瞬間、チトセが林の中

に突入してきた。

彼女は突入の直前に一番最初に近くにあった刀を抜いて持つており、現在は二刀流の状態だ。

……やっぱりそうか……。

彼女は最初から、刀と鞘を使って戦っていた。

それはつまり、両手で武器を扱うことに慣れている、ということだ。

だから、彼女が本気になればもう一本の刀を出してくるであろうことは予想していた。

……まあさすがに、こんなに出してくるとは思わなかったけど……！

まあ、二刀流になっても今までと対処はあまり変わらない。

注意点として、今までは鞘のあった左半身を中心にねらって撃っていた魔法弾を撃ちこむ場所がかなり限られた、ということか。

後は防御だが、これも前衛の2人には『なるべく武器で防御しろ』と言ってあるから大丈夫だ。

そう思つて、ティアナはチトセの突入を見た。

当初の予測では、彼女は刀の間を縫つてくると思っていた。

だが、現実はそうではなく、

……刀を薙ぎ払い、吹き飛ばしながらこっちに向かつてきてる!!  
彼女が行っているのは、まさにそのようにしか表現できないことだった。

二刀流で林に入ってきた瞬間から、彼女は両手に持つ刀の射程圏内に入った刀を片っ端から上空に打ち上げていた。

打ち上げ方は、地面に刺さっている刀の鏝に手に持つ刀の切っ先の峰がわをひっかけ、引っこ抜くような動きだ。

それを自分たちに近付きながら行っている。

そして彼女が自分たちと接敵するころには、当然舞い上げられた刀が自分たちの上に漂っているわけで、

「そおら、いくぞおー!!」

接敵の瞬間飛び上がった彼女は、自分が打ち上げた刀の群れの中に飛び込むと、

「くらいな! 『剣流星』!」

刀で刀を殴り、こちらに向かって飛ばしてきた。

……ちよつと!! こんな攻撃有りなの!?

手に持たれている刀の峰によって柄頭を殴られ、まるでバットに打たれたボールのよ

うに真っ直ぐに、切っ先をこちらに向けて飛んでくる刀に対して、私たちは避ける事しかできない。

下手に受け止めれば魔力が吸収されるために防御を無視されるし、そうでなくともかなりの速さで飛んでくる刀はかなりの衝撃を与えてくるので、受け止めようとしても体勢を崩されて隙を作る羽目になるからだ。

遠距離攻撃は防御できるといふ前提が大きく崩され、隊列は無茶苦茶にされている。

しかも彼女、見た限りにおいてデバイスからの補助をほとんど受けていない。

つまり、最低限の保護以外は、すべて彼女自身の力ということになる。

空中に放り出された刀の方向を手にした刀で正すのも、

自在に操って刀を飛んでくる魔法弾の軌道上に配置して吸収させるのも、

切っ先を微調整して狙った方向に打ち出すのも、

すべて、彼女自身で行っており、デバイスからの演算や指示などの補助はうけていないのだ。

……ここまで化物じみた人がいたなんて……!

にわかには信じがたいことだが、見えている光景は現実だ。

そうこうしているうちにチトセは空中の刀をすべて打ち尽くし、両手に持つ二本のみとなっていた。



……今だ!!

「(エリオ! 行って!! スバルは牽制してエリオの援護!)」

「(はい!)」

「(わかった!)」

念話による指示のもと、スバルが空中に伸びる青い足場、ウイングロードを作りだし、チトセのもとへ向かう。

エリオはスバルに向けた注意の裏をかくぐり、チトセの背後に向かう。

そして、前後からの挟み撃ちを行った。

「うおりゃーーーー!!!」

「いっけーーーー!!!」

スバルは右手のリボルバーナックルで、エリオは手に持つ槍、ストラーダで同時に突きを放つ。

だが――

「おいおい、そんなに叫んでちゃだまし討ちの意味ないだろ?」

そんな一言と共に、チトセは体をひねって体勢を入れ替える。

先ほどまで前にいたスバルに右足を掲げ、

「ちよつとごめんよ!」

顔を踏んづけた。

「ふぎやつ!」

壁にたたきつけられた猫のような声を上げて顔を抑えるスバルをよそに、スバルの顔を足場にたチトセは攻撃の届かない安全圏に脱出していた。

置き土産に、左手の刀を一本残して。

その刀は柄頭をエリオのストラダーダに、切っ先をスバルの方に向けていた。

そして、二人はチトセを挟み撃ちにしようとかい合っていて、チトセが急にいなくなつたことで、エリオはストラダーダの勢いを殺しきれず、かなりの勢いでチトセの置いていった刀にぶつかることになる。

一方のスバルは顔を踏みつけられたことで前が見えなくなっており、眼前に迫る刀が見えておらず、当然かわせないのです——

「危ない!!」

「……ふえ? ——ぎゃん!!」

チトセの刀をまともに喰らって吹き飛ばされ、地面に激突することになる。

地面を削り、軌道上にあつた刀も巻き込んで吹き飛ばされたスバルには、何が起こつたかさっぱりわからなかつた。

……えつと、挟み撃ちして、靴が見えて、目が見えなくなつて、それでいきなり攻撃が来て……？

混乱から覚めることができたのは、親友からの念話のおかげだった。

「スバル！ 大丈夫!？」

「（ティア……？ いったい今、何が起きたの……？）」

「（今あなたは、エリオの攻撃を利用してまともに『ツバキ』の一撃を喰らつたの。大丈夫？ まだ立てる!？」）」

「（……うん、何とか……）」

まだ少しふらつくが、もとより常人の数倍頑丈な体だ、すぐによくなる。

なので立ち上がり、頭を振りながらどうした物かと考えた時、ふと視界の端に映つたものがあつた。

……そうだ、これを使えば……！

そう思つて手を出したものは、辺りにたくさん刺さっている刀の内の一本で、

……これはチトセさんの手元から離れても効果を發揮し続けている。つまり、この効果はチトセさんでもON・OFFはきかないのかもしれない。だったら、これをさっきのチトセさんみたいに打ち出せば、チトセさんにも効果があるんじゃない……！

そう考え、刀の柄を握ったところで――

「あ、コラおい！」

「やめなさい馬鹿スバル!!」

力が抜け、目の前が真つ暗になった。



チトセの刀に手を伸ばし、触った瞬間にスバルはいきなり倒れてしまったのをエリオは見ていた。

「あくあ、やつちまったよ……」

『あちゃー』とか言いながら、チトセさんは頭をかき、ティアナさんは頭を抱えてうめくように言う。

「馬鹿スバル……、こんなあからさまな罠に引つかかるなんて……！ あたりに自分の武器をばらまく人が、それを奪われることを考えていないわけがないでしょうに……」

！」

「……あく、まあ、あたしのに限らずカガミ式のデバイスには所有者以外が触ると刀が反撃するようにプログラムされてることが多い。あたしの場合握った奴の魔力の大半を吸い取る、って感じだが、デバイスの発現した能力によつては他にも、握った奴を消し炭にする、なんてのも確認されたことがある。下手に触ると命取りになるから注意するように……、って、普通言わなくてもわからないかねえ……」

チトセさんはそう言いながらスバルさんに近付いていき、うつぶせに倒れているスバルさんの腹と地面の間につま先を差し込むと、『そおれっ!!』と言いながら足ですくい上げるように放り投げ、刀の林の範囲外に出した。

「……まああれだ。少しつまらない結果になっちゃったが、一人脱落だ。んじゃ、次行こうか!」

そう言つて刀を構えたので、僕たちも構える。

「(エリオ、私が攪乱するから隙をついて打つて出て。キャロはエリオのブーストを全力でお願い。あたしの攻撃はどうせ効かないから、私へのブーストはいらないわ)」

「(はい!)」

「(わかりました)」

そう指示を受け、僕は自分のなすべきことをすることにする。

キャロからのブーストを受け、力と速さを上げた状態でソニックムーブを行い、チトセさんに向かって行く。

「おお、早いじゃねえか。それになかなか重い攻撃だ。なかなかやるじゃねの、坊や」  
「坊やじゃなくて、エリオ、です……!!」

「ん？ ああ、そうか、そいつは済まねえな。じゃあ改めて、エリオ、お前はすげえな」  
「ありがとう、ごさい、ます……!!」

僕の攻撃とティアナさんの魔法弾を避けつつ、さらにはそんな会話を続けながらも、チトセさんは一切隙を見せてくれない。

対する僕はもうすでにいっぱいいっぱいだ。

でも、一生懸命僕にブーストをかけてくれるキャロのためにも、負けられない。

「っはああああああ!!」

僕の渾身の一撃がチトセさんの右手の刀をはじく。

その瞬間、ティアナさんの魔法弾がチトセさんの左側を襲う。

チトセさんはそれを左手の刀で受け止めるが、そのせいで彼女の胴体はがら空きになった。

「そこだー!!」

僕はやっとできた隙をつくために、ストラダーにありつただけの魔力を注ぎ込み、彼女

の胴体に向かって突き込む。

それを彼女は瞬間加速によるバックステップで回避するが、

「まだまだあー！！！！」

僕はそれを逃すまいと追撃する。

それを見て、チトセさんは面白そうに笑うと、僕の方に切っ先を向けたまま左手を折りたたみ、左肩を思い切り引いた。

全力の突きの構えだ。

だが、彼女は僕が大して近づいていないのに突きを放ち始めている。

このままいけば、彼女の突きは僕にぎりぎり届かず、僕は彼女の伸びきった腕の下をくぐって彼女に攻撃を通すことができる。

そう考え、その通りに進み続ける現実には、しかしイレギュラーが混ざる。

その始まりは、チトセさんの声だった。

「さっき言わなかったっけ？ あたしの『リョウランツバキ』の無限複製、その複製を作り出せるのは刀から半径2メートル以内だって」

その言葉が終わった瞬間、こちらに向かって進んでくる刀の先に、何かが現れた。

それは、今チトセさんが持っている刀と全く同じもので、

それは今、僕の方に切っ先を向けていて、

それが現れたことにより刀のリーチが伸びて、チトセさんの持つている刀で洗われた刀のつか頭を突けば、僕に攻撃が届くようになっていて、

「——お前もいい男だが、あたしはもつといい女だ」

僕は全力の突きを喰らい、意識を手放した。



エリオ君を吹き飛ばしてからすぐにチトセさんはこちらを向き、両手の刀を振りかぶると、新しく刀を作り出しながら思い切り投げつけてきた。

その刀は、私とティアナさんのすぐ横を通って地面に深々と突き刺さり、

「フォワード陣全滅確認。これにて模擬戦は終了、つと。……何か異存は有るか?」

「いえ、前衛二人がやられたとあつては、もうこれ以上戦つても勝ち目はありません。負けを認めます」

「そうかい、んじや、お疲れさん。少し休んだらなのはさんたちの所に戻るぞ」

「はい、わかりました。……それじゃあ少し失礼します。馬鹿スバルをとつちめてやらないと……!」

そういうとティアナさんは先ほどスバルさんが飛ばされていった方へ向かって行き



ました。

……私もエリオ君を探しに行かないと……!

そう思つて小走りでエリオ君のいる辺りに駆けていくと、少し行つたところであおむけに転がつているのを見つけた。

「エリオ君! 大丈夫!」

「……うう、キャロ……?」

「まつてて、今応急処置をするから……!」

すぐに応急処置用の魔法をエリオ君にかける。

……よかつた、大したことはないみたい……。

そう考えながらも治療を続けていると、周りに刺さっていた刀がすべて光になつて、一ヶ所に飛んで行つた。

その方向を見ると、右手に掲げた刀に光を吸い込ませながらこつちに向かつて歩いてくるチトセさんが見えた。

最後の光を吸い込み終わつたのか、チトセさんは刀を腰の鞘に戻してから私たちの所に来てかがみこみ、エリオ君の顔を覗き込み、

「よう、大丈夫か? あんまりにもできるもんだからついつい楽しくなつちまつて加減できなかつたんだが、……動けるか?」

「……っはい、何とか……」

「そうかい、ならよかった」

そして、『あつはつは』と豪快に笑ったチトセさんは、今度は私の方に向き直ると、  
「嬢ちゃんもすまなかつたな、彼氏に怪我させちまつて」

とんでもないことを言い放つてきました。

エリオ君は真つ赤になって『ちっ、ちが——』とかしどろもどろになるし、私は恥ずかしくて何も言えなくなるし。

たぶん、私の顔もエリオ君と同じかそれ以上に真つ赤になつてると思う。

その様子を見て、チトセさんはものすごくにっこりと笑いました。なんとというか、『面白そうなものを見つけたぜ』みたいな顔でした。女性がしていい顔ではないと思います。

それから数分間、私たちはいろいろなことを言われてからかわれました。……その内容は、秘密です。

そんなこんなで、やっとチトセさんが満足してくれたころには、私たちの顔はゆでたカニさんみたいに真つ赤つかになっていました。

「あつはつは！若いつてのは良いなあ」

チトセさんはひとしきり笑った後、急に真剣な顔になつて私の両肩をガツ、と掴み、

「良いか嬢ちゃん、気に入った男はしつかり捕まえとけよ。そうしねえと、いざという時に後悔するのは女だからな。……これはあたしの友達から聞いた話なんだが、男なんてのはなあ、ちよつとした事で心変わりしちまうもんなんだ。しかも自分の理想を女に押し付けてきて、少しでも食い違うと『君がこんな人だなんて思わなかった……』とか言つて別れ話を切り出してきやがるし、他にも……」

そのあとも、妙にリアルで詳細な『誰かさん』の体験談がしばらく続きました。

その内容がだんだん愚痴っぽくなってきて、ある疑問が浮かんだ私は、チトセさんに聞いてみることにしました。

「あの、もしかしてその話、チトセさんの実体験なんじゃ……う？」

私のその一言で、チトセさんが固まりました。

なんだかとてもいづらそうな顔で私たちの話を聞いていたエリオ君は、私の言葉にかなり慌てた様子で、

「しっ！ ダメだよキャロ！ この人どうみても見た目と性格のギャップで人生損してるんだからー！」

「そこまで妙な気遣いするぐらいなら、いき遅れと直球で言ってくれた方がダメージ少

なくてありがたいんだがな……」

チトセさんは笑顔で言いますが、私は彼女の口の端がものすごく引きつっていたのを見逃しませんでした。

「だ、大丈夫ですよ！ きつといつかいい人が見つかりますって！」

エリオ君のその言葉についてに耐え切れなくなったのか、チトセさんはバツと体を翻すと、

「チクシヨーーーーー!!!」

ドップラー効果を伴いながら高速移動術で逃げていきました。

先ほどまで彼女がいた場所には、彼女において行かれた水滴がいくつか落ちていました。

——うん、きつとこれは汗ですね。あの人かなり余裕そうでしたけど、きつとかなりきつかったんですよ。

だから、元気出してください、チトセさん……。



チトセは瞬歩を何度も使い、なのはたちの待っている場所に戻ってきていた。

そこにはなぜか黒焦げのボロボロになったシャリーがいたが、みんな気にしていないようだったのでチトセも気にしないようにした。

そこに、高町なのはが声をかけてきた。

「チトセさん、お疲れ様です。……あの子たち、チトセさんから見て、どうでしたか？」  
「素材はかなりいいですね。磨けばかなり光ります。あたしとの模擬戦も、余裕を持っているのはあと2、3回ぐらいじゃないでしょうかねえ。さすが、エースオブエースが見つけて育てただけのことは有ります」

「あはは……。そう言っていただけだと嬉しいですよ。ところで、この後少ししたら反省会をして、解散してからシャワーを浴びて昼食になるんですけど、よかったら御一緒しませんか？ あの子たちも喜ぶと思いますし」

「あたしは構いませんよ。一人で食べるより大人数で食べる方が食事もうまいですしね」

「そうですか、ありがとうございます。それじゃあ、あの子たちが来るまで先ほどの模擬戦の映像からあの子たちの注意点「ママー！！」を、——って、ヴィヴィオ!!」

チトセとなのはが話していると、どこからかかわいらしい声が聞こえてきた。

その声が聞こえてきた方を見ると、六歳ぐらいの金髪の女の子がこちらに手を振りながら走り寄ってきていた。



後に残されたなのはたちは顔を見合わせ、とりあえず後でどうやって説明すればいいのかと悩むのであった……。

序章  
〈 F i n 〉